

# 學界展望

## 終戦後我が國における人文地理學の動向

### 概観

戦時中の我國の地理學、特に人文地理學の一部には極端な偏尚をさえ示したものが少くなかつたが、戦後四年目を迎えた昭和廿四年には、學會の開催や研究雜誌の刊行も次第に回を重ね、ようやく戦後の虚脱状態を脱して活潑な動きがみられるようになって來た。

先ず學會としては、従來東京が中心であつた日本地理學會が京都、仙台等の地方學會と提携して、昭和廿一年四月に戦後最初の大會が京都で開催され、爾來東京、仙台に於て毎年春秋二回の大會が催された。殊に昨年度の東京に於ける秋季大會には、會員の分擔による地理學各分野に関する戦後

の動向に就ての發表があり、更にシンポジウムとして「地域區分」・「平野」がとりあげられたことは、地理學會としては全く新しい企畫であつた。尤も時日の不足のため、所期の成果は收め得なかつたが「地域區分」の如きは、研究發表後の總括討論は一時間半に及び、自由な意見が交渎された爲、結論には達し得なかつたにしても、問題の所在を明かにし得たことは大きな收穫と云わねばならない。なお昭和廿三年度以來、東京に於ける八學會連合大會には、日本地理學會は言語學・考古學・人類學・社會學・民族學等の諸學會と協同し、人文科學委員會歴史學大會にも、人文地理學の参加がみられた。我國學界の最近の傾向として綜合研究の必要が唱えられているが、地理學

にとつては他の諸科學との協同研究は甚だ望ましいことであり、本年度には、日本地理學會が中心となり、八學會連合の對馬調査が行われる豫定である。

地理學關係の雜誌としては、昭和廿一年には日本地理學會の地理學評論が復刊された外に、社會地理・新地理が創刊され、廿三年には東京地學協會の地學雜誌が復刊され、京都では人文地理學會の人文地理、仙台の東北地理學會では東北地理が創刊された。しかし地理學評論・地學雜誌を除けば教育雜誌的な色彩の強いことが指摘されるが、このことは、學術雜誌の經營が困難な事情や、地理學の専攻者が他の領域に比較して少數な關係によるだけではない。戦後の出版物を一覽しても、地理學關係の著書が殆んど教科書乃至は學蒙的なものに限られてゐることからみても、我國の地理學界が研究よりは、従來安易な教育方面の途を選んで來たことは否み得ないであらう。さてこのような點は別として、戦後に於ける人文地理學界の動向をみるために、私達は廿四年末までの論文を中心にして、一

應の分辯を定めて展望を試みた。勿論執筆者の立場に従つて、必ずしもその見解は一致していないし、重複した論文もあれば、當然記載さるべきにも拘らずとり残されたものもある。また個々の分野に就ての展望は各自の擔當に譲るとして、ここではそれに先立つ概観として、一般的な傾向と考えられる點をとり上げてみた。

一、前記の諸雑誌に發表された論文の大多數が、人文地理學關係のものであることは、戦後にみられる顯著な事實であるが、それは單に人文地理學が新に社會科の主要な科目にとり入れられたと云う事情によるばかりでなく、地理學が社會科學の一部門として、人類の社會生活を地理的環境との關係において考察しようとする主張が、強く高められて來たからである。しかし従來、

方法論的研究が著しくなおざりにされていた爲に戦後の新しい事態に對する新しい方法の確立が要請されているにも拘らず、まだ充分な成果を期待し得るまでに至っていないのである。

二、地理學にとつて最も必要な地域調査

が戦後の經濟事情のために著しく阻害され或は調査統計資料類が入手し難いことにより、いきおい過去の既存の資料を利用し得る歴史地理學的な研究が多く發表された。しかしこのことは、従來人文地理學においては自然を非歴史的に理解しようとする誤謬を犯しがちであつたことも考えれば、人文地理學の非歴史主義に方法論的反省を興え、本來密接なるべき人文地理學と歴史學との關係を緊密ならしむる意味に於ても、望ましいことである。

三、我國が當面する經濟再建の課題から云つても、經濟地理學關係の論文は多くあつて然るべきにも拘らず、土地利用に關するものを除けば、産業立地や國土計畫に關する問題については極めて不振の状態に置かれてゐる。それは前記の如き事情に禍されてゐるとは云え、我國では人文地理學の研究が、これまで現實の生活と如何に結びついていなかつたかを物語るものである。

(織田武雄)

### 學史・方法論

學史的な論文としては、まず飯塚浩二著『人文地理學說史』(日本評論社、昭二四)『地理學批判』(帝國書院、昭二二)があげられる。飯塚氏は、個々の地理學說をその各々が成立した時代思潮の中において見るという立場から、前著では、古代から近代の地理學、フンボルト及びリッターに至るまでを概観した「地理學發達史」から始まり「地理學史の諸問題」「世界史と地理學」「ゲオポリティクの基本性格」等に就いて論じてゐる。即ちヘルダーにあつては、浪漫主義との間の親密な關聯を考え、フンボルトの地理學の基調には、「ニュートンに見られるごとき力學的、機械的な自然觀とは異つた、常に生命の息吹の通つてゐる同一體を忘れることのない有機體説的な自然觀」を指摘し、さらに一方、「常に神學的目的論者たるの故に多くの攻撃に曝されてきたリッター」のうちに、かえつて十九世紀ドイツを母胎とした浪漫主義の思潮を發見している。これに續くラツツェルの地

地理學には、從來の有機的な世界觀とは無縁な十九世紀後半を風靡した「Darwinism」とし、<sup>3)</sup>、所謂運動論或いは力學的人文地理學をみる。後者でも、「學派と學風」「地理學的方法論的反省」「地理學的方法論の通俗性について」等に於いて、「眞理は時代の娘」としての見解から、既往の地理學を吟味しながら、更に來るべき地理學への方法論的な準備を整えて行く。

飯塚氏の學史が地理學にとつて、大きな貢獻をなしたのは事實であるが、さらに、我々が今後に期待したい事は、それぞれの地理學説はそれを擔う時代思潮の中にあり乍ら、猶一つにはそれを生んだ個人の内的生命の具現である故に、先人たちのうちの多角的な世界像の細かな陰翳を照し出してゆくことであると共に、動かし難い生の「地域」と對決して、我々が解明しなければならぬ地域的類型化の方法論的課題——この緊急な問題にとつて、既往の地理學説が如何なる價值をもち、如何なる技術的實踐的指針たりうるか、という現代的問題の解

明でもなければならぬ。蓋し、既往の學説は、「時代の娘」である以上に、個人を超えた地理學的生命の一駒であるからである。

その他、鮎澤信太郎『地理學史の研究』（愛日書院、昭二三）は、明末清初の耶穌會士によつて刊行された世界地理書とそれが我が國に及ぼした影響について論及している。また日本文人地理學の發達を回顧反省したものとしては、小田内通敏「日本人地理學の啓蒙期」（新地理二の六—七）がある。

方法論に於いては、時代的要請を背景に史學にあつて文化史的方法にかわつて社會經濟史的方法が急激に擡頭して來たのと相應するかの如く、地理學の側でも、土地を空間的擴がりをもつた社會的生產手段として、自然環境を採擇する社會的要因を強調しようとする傾向が第一に目につく。それには、中島健一「自然と人類——とくに人類社會の發展における勞働の役割について——」（新地理二の六）『地理學』（一九四九年）を始め、岩田孝三「人文地理學の在り

方」（新地理一の四）高橋徳治「再建地理學に願う」（新地理一の三）飯塚浩二「人文地理學の立場——歴史學・地理學・地理的環境論」（日本史研究）等があるが、とかく此等が單なる問題提起に墮しがちなのに反して、これを具體的な地域に求めつつ、方法論的に追求することは今後の課題であるが、ただ飯塚氏が、自然環境の主體たるべきものとして、「地域社會」の概念を提起したことは、社會科學としての地理學に多くの問題を投げたものと云えよう。だが、「われわれの勞働は、まず、人間社會と客觀的實在たる自然との間の過程——即ち、のなかで人間がかれ自身の行爲によつて、自然との物質代謝を媒介し、制規し、統制するところの過程を形成する」（中島）という定式化や「自然と社會との媒介として社會を求める」（飯塚）という觀點だけでは、從來のミリニューテオリを社會經濟的に深化したに過ぎず、*pat excellence* に地理學プログラムの課題とは云えない。

此處に如上の學派から疎外され勝ちなヘットナーやシュリーターのスタイルを再

確認しようとする要請が生れざるを得ない。織田武雄氏は、「地理學を以て地誌的科學と稱する（ヘットナーの見解には直ちに組し得ないとしても、尠くとも地理學の目的が地域的個性の闡明に存することは否み得ない）」として、エンゲルブレヒトによる世界農業地域の設定法を紹介すると共に（經濟地理の項参照）、日本地理區に關しても從來の學說を綜合して、十四區を設定し、その概觀を試みた。（織田武雄「日本の地理區」日本の風土、立命館大學文學部地理學研究室編、昭二三）また後で經濟地理の項に紹介される除野信道氏のチューネン圏の日本農業地域への適用の如きも、地域區設定乃至地域構造究明に際して、具體的な方法論的示唆を投げかけるものであろう。さらにこの地域性や地誌の立場を始終堅持し、日本全土に關する長年月のフィールド・サーヴィーを系統的に集大成したものととして、田中啓爾『地理學の本質と原理』（古今書院、昭二四）が公刊された。氏は、地域性、南北性、地形性と輪廓性、乏水性と湧水性、氣候性、家屋度性と人口度性、網

性、圏性、勢力性、都會性、地人一元論等々を述べ、特にその中心テーマである圏性については、「人類活動の勢力範圍を示すもので、所變れば地理がある事を如實に語ることになるこの圏が、地面を占據するに當つては、集團的に連鎖することもあれば、不連続的に離れて存在する事もあり得る」として、商圏その他の多數の圏を設定し、また鎖境性と越境性等を區分し、詳細な具體例をあげている。だが、地理學の本來の主流が、一定地域に積分した諸事象の相互關係を究め、地域構造を分析綜合するところにあるということは、單に文化諸要素の地的攢がりを確定して、恣意的に多數の諸圏を設定することだけでなく、尠くとも J・G グラネが、フィンランドの景観區を取扱つた場合の如く、先ず多くの種類の現象に就いて夫々の地域を設定することを基礎的操作として、更に此等の地域を重ね合せて、綜合的地域を設定する事を志すと共に、これら諸圏が重複乃至包越交錯する理由を探究することによつて、地域的に複合した文化諸要素の機能關係及びその核心と

外縁を動的に把握すべきではあるまいか。かかる方法による圏設定は、既にアメリカ文化人類學派に於いては、C・ウィスラーによつて、アメリカインディアンの文化類型による文化地域の設定に際して採用された方法であるが、更に最近クローバーにより、これらの文化地域區分が、植物生態學的な地域區分と比較對照せしめられていること（Kroeber: Cultural and Natural Areas of Native North Amer. 1939）は、地理學徒の看過すべからざる傾向である。クローバーの新著については、西村朝日太郎氏が、環境論の立場から紹介している。（「環境論の再吟味」新地理二ノ三）また、「地域」は、早くからガルピン・ンローキンや鈴木榮太郎氏等農村社會學の畑でも、一定地域に凝集する社會的結合關係の性格を究明するという觀點から取り上げられている（鈴木榮太郎『農村社會學要論』時潮社、昭二十。米倉二郎『社會學者の地理學批判』新地理二の七）が、石田寛氏は、ガルピンがワイスコンシンの農園で調査した方法を、地理的に、岡山平野の地域社會に

適用して、諸地域の社會區の設定を意圖している（地理學評論、二二の四・五・六合併號）。また石田龍次郎「散村とその耕地」（一橋論叢二二の六）は、後述する高橋幸八郎氏の方法論と、一部に可成り類似した見解を含みつつ、從來の「形態學的」集落を、かかる地域社會に於ける重要な機能的因子として考察している。即ち、「集落地理學」として散村における課題は、單に集落が散在するとゆうことではなくして、その形とその地域の社會生活とが、どんな關係にあるかとのゆうことである」として、彌波平野の散居村落に於ける自作地・小作地が、自家の周圍に集合していることを例證し、その原因として、割替制度における「引地」をあげ、これが散村という地域的事實を基礎として慣行小作權の發生を導き、さらにかかる事實を背景にして、此の地域では、今日の農地改革が、集村地域の交錯農地の場合には見られないスムーズな進展をみたとする。かくの如く、「形態」の中に有力な社會的機能を見出し、位置づけようとする氏の方法論に、我々は人文地理學の社會學的深

終戦後我國の人文地理學の動向

化に對する具體的方向の一つを認めることが出來よう。また歴史的人間をその主體とすべき「地域」は流動的な側面を内に含んでいるのは當然であり、今日の文化諸科學の主要なテーマたる「文化接觸」や「文化變容」の諸問題を、「地域」相互の交渉及びそれによる「地域性」の變化という觀點から分析することによつて、如上の諸論になお巢くらしいがちな平面的な非歴史性を補正すべきは論をまたない。

一方、「地域」が、行動空間として、如何に地圖化されたかに就いては、水津一朗「未開人の地圖」（日本史研究八）「古地圖にあらわれた北大西洋の性格」（人文地理三）がある。また、環境をライフ・スペースとして、トポロヂカルに把握しようとしたものとしては、相良守次「行動と生活環境」（築土書店）がある。此處に示された行動の場の構造は、意識心理學の克服を計る行動心理學の側から試みられたものとして多分に心的力の力學的構造にかたよつていて、この空間的擴がりのないライフ・スペースに、具體的な擴がりを與え、文字通り社會

生活の實踐的場たらしめるものは、リアルな土地に立脚した地理學的「地域」の究明でなければならぬ。

ともあれ、「地域」が異常に強調されるに至つたのは、地理學だけの潮流ではなく社會諸科學に於いても、人文現象の歴史性と並んで、「空間性」「類型化」が特別に注目され始めたのであつて、今やこの問題は、焦點の攝え所を論外とすれば科學全般の課題たるを失わないのであつて、次項にあげられてゐる藤間生大氏の庄園經濟の地域的變化の把握、福武直氏による日本社會の東北と南西に於ける構成變化の類型化、「福武直、『日本農村の社會的性』」（東大協同組合出版部、昭二四）、プロック説を踏襲して、フランスの社會經濟的構造を、東部の集村的強制耕作地と西方の散村的獨立經營地域とに二分した高橋幸八郎氏の方法論（高橋幸八郎『近代成立史論』日本評論社、昭二四）、あるいは幕末日本を、「東北型雄藩」と「西南型雄藩」に分析してマニファクチャー論の視點を定めた奈良本辰也氏の立場（奈良本辰也『近世封建社會

史論」(推古書院、昭二三)等は、正に「地域」を固持しつつ、しかも社會經濟的方向に進展しつつある人文地理學にとつて、明るいサイドライトを投げかけるものである。

次に地理學の生態學的進展について一言しよう。抑々一定地域に分布するものは、人間集團、あるいはその文化だけではなく、其處には動植物の群がみられるのであり、土地を媒介として、植物、動物、人間社會の間に相互依存の關係がみられるかぎり、地域の構成體は、人間結合とその所産だけではなく、植物群落—動物集團—人間社會の結合でなければならぬ。かかる觀點から植物生態學や動物社會學の「群落」「群」更にはクレメンツやシルフォードの「生物社會(Biome)」の概念と方法論を新學に導入しようとする試みが頓に盛んになり、菊地利夫「地理學に於ける自然概念の發達」(新地理一)の四、「クレメンツ・シルフォードに於ける生物社會 Biome の概念」(新地理二)の四、飯塚浩二「集團と環境」(新地理三)の一、今西錦司「草原行」(府中書院、

昭二二)「生物地理學とその學派」(智慧六)「遊牧論その他」(秋田屋、昭二三)「生活共同體の認め方」(科學季刊、一)が出た。今西氏は、生物生態學の系譜を、シンバーの分類學的生物地理學に求め、「ある種の生物がある地域に分布して、そこに生物分布帯なり、地域共同體なりを現出して」といふ一つの事實—地理的事實—に立脚して、人間をもふくめた新しい *öko-system* の建設を企て、既往の人間をエリミネートした生態學的自然系が、「人間の加入によつて如何に變つてゆくか」ということを、「Landschaftkunde」といふような曖昧な形においてでなく、どこまでも生態的な理論づけのもとに構成しようとする。そして、「人間をも含んだ結合的生活共同體の體系」は、「いちじるしく人間の色彩の濃厚なものになる」として、内蒙古に於ける遊牧生活について、ステップの動物と人間との *共生* 具體的に分析した。飯塚氏は、ファウナ・フローラ及び人間の地域社會を一つの寄生世帯とみる立場から、これらの相互の間に存する食物連鎖

の問題をエコロジカルにとらえようとす。また小栗宏氏は、地域的分業のうちにジンビオオーシ的な生態を認めた(小栗「地域的分業と地域的秩序について」新地理三)の二)その他、飯塚浩二「世界史に於ける東洋社會」(毎日新聞、昭二三)「遊牧民の政治地理學—蒙古史の理解のために」(歴史評論、昭二二)「遊牧民の制覇と隊商商業」(歴史學研究、昭二三)にも、所々に、鋭い生態學的な洞察と見解がうかがえる。(歴史地理の項参照)

かかる生態學的傾向と相呼應して顯著な傾向は、その他の項でも紹介されているように、自然地理學の人文地理學的再編成への動きであつて、生活氣温、體感、作物氣象、動物季節等、主觀的な自然、アンスロポ・セントリックな環境を把握しようとする流れも注目すべきである(「最近の地理學の動向」新地理四)の一)の潮流が、やがて、パンゼの表現主義地理學や和辻哲郎氏の「風土」的立場を、眞に實證的地理學的に再構成することは期待してよからう。

以上列舉し來つた學史的方法論的動向が

眞に斯學の再生に寄與するためには、それが、机上論にとどまることなく、地理學本來のフィールド・サーヴイーに深く滲透しなければならぬ。この事に就いては、次の各項が具體的に述べるであろう。

(水津一朗)

### ——歴史地理——

終戦後の歴史地理學の傾向に新しいものが見られるであろうか。少くも歴史地理學の問題が人文地理學と別個の切りはなされたものとしてではなく地理學の中に眞剣に検討されようとして来たことは事實である。今日ではもはや歴史の單なる補助學となわち具體的にいえば歴史の地理學的研究法が歴史地理學だと他人事のように考える人もなさそうである。また歴史地理はもとより過去の景観、地域性の復原を具體的な職能とするが、それは一方現在の地域性理解への道でなければならぬように思われる。その意味から筆者は地理學の歴史的研宄法もまた歴史地理に入れられるとも考え

ている。

まづかかる歴史地理の理論的な問題をう

まく要約したものは田澤英一「歴史景観論の課題」(「新地理」二ノ六)である。

田澤氏の論はハッシンガ어의歴史地理論を批判し一步發展させたもので、人文地理學の目標が單なる歴史の地理的解釋ではなく景観の記述であり、説明であるというハッシンガ어의見解を承認するにしても……景観論は景観の記述ではあつても説明ではないと云わなくてはならないとし、景観論の立場からすれば歴史的形成の立體的立場はどこまでも理論の外に立つてゐることの物足りなさを述べ景観の構造の變化を規定するものは歴史の問題であり、われわれは逆に景観構造の分析によつて景観の在り方を規定するもの、すなわち歴史へのつらなりを見出すことが出来る。というのであり、從來の環境論的歴史地理學は勿論、シュリューターに流れを汲む景観論の再検討を行っているのは注目すべき論文である。このほか飯塚浩二「遊牧民の制蹄と隊商業」(「歴史研」三二)なる論文も從來行われたデンギス汗時代の蒙古族が血に渴した殺戮者であり都市村落の破壊を常に要求するといつた

既成觀念の欺瞞性を生産手段の利用如何の問題に關聯づけようとした特殊な歴史地理論である。しかしこれらの理論にもまして終戦後の歴史地理の實證研究の領野は案外豊富である。まず單行本からあげてみよう。各時代に通じた歴史地理學の概説書は得られない。これはなお各時代毎のプランクがうずめられていないことと、この學の性格に關し検討の餘地があるからであろう。しかしそれに近いものとして米倉二郎『聚落の歴史地理』(昭和二十四年)や特殊な一般向きのものとして矢島仁吉『平地と生活』(昭和二十三年)をまずあげる。こゝが出来る。兩者とも既發表の論文を平易に要約、つなぎ合せて社會科としての參考書をも兼ねしめた點は、賣行きを考ふる書店の方針を物語るが、學術的にも決して低い位置を占むるものではない。ただ米倉氏の場合聚落のみに限定され、矢島氏のものも新田村落や溪口聚落といつた平素の著者の研究領域の項目以外のつなぎがやや低調であり、ことに平地と生活といつたテーマはよいが、平地が歴史地理に占める位置と

いつた自己の方法論があまりにも貧弱であることが惜しまれる。米倉氏の條里量觀復原論は既に十數年以前發表された着實な卓説にちがいないが、その後の自己批判のあとが見られないのが残念であり、歴史時代における都市と村落との聯關性、各時代毎の聚落同志の連續性といつた問題がなお取上げられていないのは、本書にみられる政治的人物本の歴史事實の舊式な敘述と共に、やや物足りなく感じられる。しかし本書出版の意圖から或はかかることまで望む方が無理であろう。其他特殊なものとしては天坊幸彦『上代浪華の歴史地理的研究』（昭和二十二年）、喜多村俊夫『近江經濟史論攷』（昭和二十一年）高倉新一郎『郷土と開拓』（昭和二十二年）小野武夫『日本村落史概説』（昭和二十三年）同『北海道拓殖史』（藤岡謙二郎『地理と古代文化』（昭和二十二年）野村豊『大阪府における辰尿利用の變遷』（昭和二十三年）等があげられる。いずれも特殊なテーマだけに書かれた目的が必ずしも地理學としてではないから今は一々の内容批判はさけない。

喜多村氏の場合近江の經濟史に關する論文集ではあるが本陣、助郷、琵琶湖の湖港京津間の爲登米輸送、近江盆地の灌溉用水問題等いずれも近江の歴史地理學研究への基礎資料を着實な實地調査により統合した點で高く買われるべき論文集である。同じ著者によるこれらの地味な資料を基礎にした地域を主とした歴史地理の概説が期待される。藤岡の書物も先史時代以降の環境の變遷ことに日本における低地帯の發達が文化をどのように規定したかの問題を主として地形と遺跡分布の姿から説明したが、結果は環境決定論のごとくなり、一方文化説明の一方法の如くにもなつた。地理學の主とする地域性の闡明が取上げられなかつた事が本書の根本的な缺陷であることを自己反省する。

つぎに論文について紹介批判しよう。まずあらゆる時代にふれたものとして注目されるのは谷岡武雄「日本の土地開發」（『日本の風土』（昭和二十三年）所収）である。同氏はこれを一、中世以前の土地開發二、近世以降の土地開發三、干拓によるエクメ

ーネの外への擴大の三項目にわから要領よく日本の開拓史を地理的に概観しているがうち三項の海岸の新田分布についてこれを二つのタイプに區分していることが特に注目される。西南日本内帯の伊勢海、瀬戸内海、有明海をむすぶ地域と、それ以外の全地域とするのである。前者を内海型、後者を外洋型と名付け、「内海型は遠淺の海岸に蜿々と堤塘を築いて海水を遮斷しその内帯を干拓したものであるに對し、外洋型は人工の築堤にかわるに自然に發達した砂嘴や砂丘によつて内にいだかれた湿地若しくは潟湖の干拓されていつたもの」とのべ、その自然地理的理由、ことに等潮線の分布と干拓地の關係を論ずる等新しい見解が注目されるがすべての新田がこのように劃然と區分されるかどうか、同一地域でこの兩様を具備したものもある筈で等潮線云々の問題は別に他日同氏による多くの資料を基礎にした統計的な實證研究が期待される。その他中世と近世との中間の時期、日本全體の地域を主とした開拓地域の分布、耕地率の問題等の觀點は本書からはすされてい



るが、ともかく限られた頁數で日本の土地開發を新しいポイントから要約し將來の問題を暗示した點は高く評價せらるべきである。その他この方面ではなお中野章正「日本の森林資源の荒廢」(「新地理」三ノ二ノ三)織田武雄・谷岡武雄「京都府下童仙房の開拓と現状」(「日本史研究」五號)藤岡謙二郎・谷岡武雄「海岸に於ける土地開發の歴史地理的研究」(「立命館文學」六一號)高倉新一郎「北海道の拓植と地理」(「社會地理」二〇號)新井浩「相模野の大沼新田」(「社會地理」二號)前川貞次郎「ターナー」(「アメリカ史に於ける邊境の意識」)(「人文科學」一ノ四)等各小地域における歴史時代の開拓問題を取扱つた論文がある。

つぎに景観變遷史に關するものうちまづ自然景観を主としたものとしては、多田文男「登呂住居の埋積」(「考古學雜誌」三ノ二)同「華北の原始景観」(「學藝」三七)吉田敬市「巨椋池湖岸變遷考」(「日本史研究」七)藤岡謙二郎「紀州熊野浦海岸低地の景観變遷」(「地理學評論」二一ノ四・五・六)があげられる。多田氏のはじめ

#### 終戦後我國の人文地理學の動向

の論文は登呂の先史聚落が形成當時いかなる地形環境にあつたかを、安部川下流々路の變遷から説明した注意すべき先史地理的論文であり、吉田氏のものもまた巨椋池湖岸の變遷を文獻と實地調査から考證したものである。つぎに聚落、耕地景観等人文的景観を取扱つたものには藤岡謙二郎「日本の聚落」(「日本の風土」所收)「畿内の環濠聚落の問題」(「學藝」三七)「歴史的都市の平面形態」(「古文化」一)「寺内町の性格」(「人文地理」一)藤岡、谷岡武雄「山城盆地南部に於ける景観の變遷」(「日本史研究」七)谷岡「かいと(垣内)と村」(「古文化」一)宮下藤雄「加賀平野における聚落の發達」(「社會地理」一六)長井政太郎「山形盆地の域下町」(「東北地理」一ノ一)等がある。藤岡は日本の聚落の平面形態の中には過去の歴史性が廢用きかんとつて各處に残存しているから、過去の聚落形態を理解することが結局現在のそれを理解することにもなるというのであり、ことに環濠聚落における中世的様相を強調した。しかし景観論がすべてを説明しうる

がごとく強調した筆者の誤謬は一部の人からも指摘されたところである。

つぎに交通方面に關しては織田武雄「印度洋に於ける古代の海上交通と季節風」(「日本史研究」七)「ネアルコスの印度洋航海記」(「學藝」三七)「フント考」(「古文化」一)ソロモン王オフィルの航海について(「史林」三三ノ一)須藤賢「濱州碼頭」(「立命館文學」六四)田邊一郎「江合川の舟運」(「東北地理」一ノ一)古田良一「日本海の沿岸海路」(「社會地理」一八)内田寛一「仁科三湖及び糸魚川街道地帯に於ける交通—鐵道開通前—」(「新地理」二ノ二)等がある。織田氏の論文はいずれも考證物であり、就中フント考にてはエジプト人によつて想像された理想國フントとソマリランド沿岸と比定し、オフィルの場合もまたアビシニア北部山地の産金地に對する輸出港だとみなし、ソロモン王の古代航海についての諸種の地理的條件の考證を行つてゐる。かかる古代の地名研究は從來史學者文獻者造によつて、單に古文獻や言語の比較検討のみがなされていたのに對し

織田氏はその豊富な現在に關する自然地理的(位置)經濟地理的(産物)知識を自由に驅使して考證を行つてゐる點で、従來の歴史地理研究には見られなかつた一つの新しい研究法を暗示している。同様に須藤氏の論文もまたマルコ・ポーロ旅行記にみえる濟州碼頭を考證したもので、内田氏また鐵道開通前の運輸狀態、運輸量、糸魚川、信州間の輸送物資の交換等を説明したものである。その他灌溉水利、水災等に關するものとしては喜多村俊夫「與荷米慣行地域に於ける灌溉水利問題の研究」(「新地理」一、一、二)「灌溉用水の分配と用水權に關する歴史的研究學書」(「社會地理」一七)河野通博「江戸時代に於ける利根川の治水」(「日本史研究」一〇)「清代に於ける湖北省の洪水」(「人文地理」二)等がある。河野氏の論文とともに現在の洪水狀況を説明し乍ら、過去の水災を年代別、地域別に考證したもので、かかる水災史の地理學者側からする研究も従來はあまり注意せられなかつたところである。また人口や石高、商國に關聯した論文としては「淺香幸雄石高より

見た横濱、川崎附近」(「地理學評論」二、九、一)「明細帳等より見た川崎、神奈川、保土谷宿」同(二、二、一)、藤岡謙二郎「城下町と近畿の市町村」(「立命館文學」十五周年記念號)井關弘太郎「近畿への米穀供給圖」(「日本史研究」七)等がある。淺香氏の場合各部落毎の村高と戸数をしらべ一戸當りの石高を算出し、村落の生業的特質を調査したものであり、井關氏は平安以後の和貢物の分布とその近畿への輸送に關する駄賃廻米量等の地域的異同その他を取扱つたものである。最後に明治以降の都市及び近郊村の變貌に關する日本全體の地理學の課題を示したものに石田龍次郎「日本産業革命期の地理的諸相」(「日本史研究」七)なる論文がある。産業革命が地域をいかに變貌せしめたかが地理學の課題であることを強調した暗示深き論文である。

以上が大體地理的なポイントに主體をおいた終戦後の歴史地理關係の論文であるが、歴史地理學の基礎をなす經濟史的な研究論著はこの間成り出版されており、こと

に庄園や近代産業を取扱つたものの中には北陸型、東北型、西南型といった經濟形態の地域差が問題にされているが、これらにおいて、もとより主體は經濟の構造であり、地域の構造ではないから直接歴史地理學の問題とするわけにはいかない。同様の論文においても例えば奥田貞啓「莊園前村落の構造について」(「史學雜誌」五八、三)「東大史料編纂所」山城國葛野、乙訓兩郡條里補考」(「史林」三二、二)飯沼之郎「石高の近世諸藩に於ける内容の差異に就いて」(「日本史研究」一一)等注意すべきものがみられるが要するに歴史地理にあつては、これらの基礎資料をもとにして歴史時代の地域性を把握すべきもの、したがつてこれら歴史時代の資料が常に現代の地域に關聯性をもつものでなければならぬ。とはいへ筆者は歴史地理學の研究が例えば村落ならその景観をモルフオロギッシュに把握すればそれで足れりというのではない。景観を構成する内部的社會構造の理解を深めなければならぬことは論をまたないが、ただ内部構造だけの研究は歴史であつて、

地理學ではないというのである。このことは地理學が非歴史的な空間學問であり、シユリターという時間の克服ということを意味していない。明日の歴史地理學はもつと地域の社會經濟史的構造の理解に進まねばならないことは事實である。ただその場合我々に地理學徒には地域のといつた形容詞を取り去ることが出来ないのである。

(藤岡謙二郎)

### ——經濟地理——

經濟地理に關する研究は戰後なお沈滞の状態にあつたが、そのうちでも土地利用の研究は割に華やかな方であつた。その一因は國土の集約的合理的利用への社會的要請にもあり、國內開拓問題などはその例である。

全國的規模のもとに行われた、組織的にマッピングな試が依然なかつたのは残念であるが、内務省地理調査所の全國土地利用圖作製のごときは有意義な仕事として擧げられる。また日本農業研究所も全國的な農村實態調査のプランに着手したが、現在中絶

終戦後我國の人文地理學の動向

の状態にあるのは遺憾である。

土地利用の自然環境に關するものとしては『日本作物氣象の研究』(朝倉書房)をはじめとする大塚美保氏の業績は注目に値する。同様に田澤博「北海道農業の豊凶をさぐる」(一九四七年)は好著であり、長期豫報の問題など益する所が多い。従來自然環境と土地利用の關係はいたすらに重要性が説かれるのみで、いかにしていかなる程度關連するかは意外に把握されていない。この點前記諸氏と共に中原孫吉『農業氣候の研究』(朝倉書店)も、小冊子乍ら特にソ連地域の研究成果を多く紹介し、フレッシユな作品である。吉良龍夫氏の一連の研究發表は、特に農業地理に役立つべき新氣候區分を行い、寒暖の指標としては簡易な「積算溫度」「溫差指數」及び「寒さの指數」を創定し、東亞の水平的區分及び日本の垂直的區分を論じた。(『農業地理學の基礎としての東亞の新氣候區分』(一九四五)年大農京部)「東亞南方圏の新氣候區分」(同上)「溫差指數による垂直的な氣候帯のわちかたについて」(二卷二號)「寒地農學」

「高冷地の利用

に對する氣候學的な基礎について」(生感二卷)「氣候區分の基礎問題」(一巻四號)

筆者もこれに協力し、溫差指數が農作物のカロリー計算による土地生産力表現との間に密接な關連あることを指摘した。(川喜田二郎「カロリー計算による土地生産力の量的表現」(社會地理)作間慶二氏は「動植物及び農作物の分布と氣候」(新地理學)において氣候指數と生物帶及び農作物との關連に關する最近の試みを適切に批評紹介した。但し茲で自ら試論された「氣溫指數」なる指數をシュミット線や暖帶作物北限その他と對比させる手法は餘りに粗雑で、水稻栽培北限線との對比は誤謬と信ずる。なぞ Thornthwaite が最近 Geographical Review (一九四八年)に發表した氣候區分は、特に乾湿度の表現でアメリカでも劃期的との好評を博したが、關口武氏(地理學評論)及び吉良龍夫氏(前掲)により紹介と批評がなされた。また N・R・S の活動を紹介した菅野一郎「關東地方の

土壌圖について」(社會地理)は立派な地圖と表とをのせ、アメリカ地理學的方法的なマッシュヴなやりかたにつき、日本の學界に對する警鐘である。

以上を逆覽すると、自然環境と土地利用要素との單なる對比論にとどまり易かつた從來よりは、農分兩者の架橋作業に歩み寄つてきた感がある。單なる自然科学的環境學に非ず評價という企てが實際的要請からも起りつつあることは、例えば倉田昌造「土地資源の開發と土地分類—開拓地を例にこつて」(社會地理)の如くに見られるが、それでも氣候的相違の如きが無視されている。そもそも氣候・土壤・傾斜などの環境諸要素がそれぞれどの位の比重で評價されるべきかという仕事は、総合的評價を企てる地理學の獨り舞臺にも拘らず、殆んど處女地の感がある。

農業地域區分では松井勇「農業經營組織による日本の地域區分」(地理學評論二卷)があり、詳細な統計的研究である。但しこの種區分論一般への希望として、方法論的に一貫して世界中に適用できるやりかたで

なければ、「積み上げ」や他の試みとの切磋琢磨の可能性が生じないのではないか。織田武雄「農業地域に關するエンゲルブレヒトの業績」(史林三一卷)は、彼の農業地帯論を紹介したものであるが、特にチューネンにつづくブリンクマンその他最近のドイツ諸研究家の仕事を綜合して取上げ、單なる作物分布帶論などの仕事に終らず農業經營論的地理學への試みをなした彼の國の行きかたが意外に日本の地理學に消化されてい、ない點からも有意義と思う。除野信道「世界經濟の地域構造」(四九九年)はその中に「農業の地域構造」について多くを費し、經濟學と農業地理學が緊密な握手をするには好個のブリッツェを用意する力作である。ただ同氏はチューネンの理論を演繹適用し、その世界各地に對する檢證に終始しているが、しかしチューネンであれブリンクマンであれ、このスタイルには農業立地に關し飽くまでもチューネン圖の考え即ち消費・生産兩地の交通輸送關係を最優位な立地因子とするドグマが

固執される。このドグマに對する最も痛い急所は、自然的な土地生産力の相違という因子をもて餘し、その結果それを過少評價または無視せんとする。農業立地を規定するはずの消費地が、逆に農業立地によりその生長發達を大いに左右される點の認識が不十分なことである。その結果チューネン以來立地構造の靜的理解に止まり動的な發展方向に對する豫測的創造性に欠け、ひいては現實への有用性を失つてきている。除野氏の試みもまた殆んどこの弊をそのまま受継いではいないだろうか。なお工業立地論におけるソ連・朝鮮及びアメリカの研究は教えられることが多い。

尾留川正平氏の諸研究特に「農業地域形成原理としての集落性格論」(地理學評論二卷一〇號)その他「島海山北與麓に於ける高距集落の林野依存度」(新地理)「海岸砂丘の開拓率と都市因子」(地理學評論二卷二號)「木曾川河口に於ける砂洲の成長と干拓」(地理學評論二卷一號)など、土地利用の様相を成

立たしめている社會的要因を方法的につかもうとする熱意が頼もしく、はつきりした指標で計測的實證的に進もうとする點多大の共鳴を感ずる。更に佐々木清治「農村社會の地理」(新地理三卷)は、副題に「農民と農具との地社會學的考察」とある如く新しい觀點からグレンツ・ゲビートの開拓を企てようとする興味深い試みである。同號の宮坂樺朗「資本主義發達史における畜産と國民經濟の交渉」は、すこしも具體的な地理性が感ぜられない。

榎井豊氏の力作「農業生産力論」(農研

第一輯一)は土地利用に於て最肝要なるべき土地生産力及び労働生産力の問題を眞向から取上げた態度に敬服し、この研究をなおざりにしていた地理學界のトリビアリズムに對するこの上もない警告でなければならぬ。しかしその出發點の土地生産力の檢討において、同氏は歐米の農業が耕地に對する作付面積の小さな農業であることを忘れて作付面積當り収量に比較したのみで、その結果「我が國の地味は歐米のそれに比

し別段劣つていないにも拘らず、土地生産力は必ずしも欧米に優つてゐない。」という重大な誤謬に陥つてゐるように思う。また同氏が唱える「労働生産力」土地生産力併進説」は、好都合な資料のみを動員して得た希望的觀測の感がなくはないか。評者の資料によれば反證も大分あるようである。従つて上記の説の具體的解答として「水田輪作」水田階農論」が提示されるが、一體農作物カローリが家畜の飼料となつて畜産物に轉化された時、どれほど利用歩留りが減るかについて數字もあげてないようである。ヨーロッパ今日の食糧不足を理解するには、人間以外に牛飲馬食する人口の檢討を抜いて正當な理解はあり得ない。これらの諸點は深みのある地理性の理解が隣接諸科學において未だしの感を深めさせる一例である。

開拓問題では高倉新一郎氏の諸著(「郷土と開拓」(一九四七年)「北海道拓殖史」(柏葉書院)

(同上)「北海道の開拓と開拓者」(一九四七年)「航海道の開拓と開拓者」(七年札幌社)や山口彌一郎「北上川流域の開拓」

(東北地理)のごとき夫々の郷土における開拓問題を深い愛情をもつて倦むことなく研究する人々の良き發表がある。渡邊操氏らの活躍も目立つ。「開拓地土地利用の將來」(社會地)渡邊・延井「我國開發可能

地の地理的性格」(新地理)「北海道の中樞津村」(社會地理)など。前記倉田氏と同じく、上野福男「高冷地の開拓」(新地理三卷)も八ガ岳山麓をフィールドとした研究である。これらを通讀すると、

土地分類と評價の研究が、實際面からの刺戟で漸く動きはじめたことを感ずる。ただ分類指標と尺度がもとづく根據及び意義につき、少くも反省吟味をのべてほしかつた。でない、それはいつそう大きく理論と結合すべき實用地理學へ發展する希みが

なくなるであらう。田中燾「日本の開拓地について」(人文地理)は農林省開拓局のリードによる開拓事業を紹介し、その進行状況と批判を供するが、農地解放に伴なう適正規模の框の過少を指摘しているのは當

を得ている。

外地を對象とする研究には、多田文男「内・古の遊牧」(「社會地理」一〇號—一九四八年) 中野尊正「内・古中部の農業地理」(資源研究一九四五年) 中尾佐助「中國周邊山岳地帯の農耕文化類型について」(「學藝」三七) 安達生恒「長城地帯の農業とカソリック」(「人文科學」) 仲松彌秀「南嶺平頂峰上の土地利用」(「地理學評論」第二) 別技篤彦「ジャワにおける土地利用の展開」(「社會地理」一九四九年) などを見うけ、また淺井辰郎「ツナ河畔の村々」(「社會地理」一九四八年) 山口平四郎「北滿農村素描」(「地理」二號—一九四八年) などは格別土地利用をとり上げたものではないが多くをふれており、また能登志雄氏の豊富な南方生活の経験にもとづく研究や彼述「南アジアに於けるアラン・アランの研究」(「地理學評論」第二二) 卷一號—一九四九年) 「テモール島觀察記」(「新地理」第二卷) 二號、一九四八年) など、その中に土地利用の問題にふれて

いる。これらは皆、こころばらく活躍できない地域の研究だけに、もつともつと多く集成しておきたい。

その他質證的な小地域研究資料として好ましいものに安田初雄氏の諸研究(「信天山の斜面耕作」(「地理學評論」第二卷) 一三號、一九四八年) 「藏王火山麓の土地利用」(「東北地理」第二卷一號) 「吾妻安達太郎火山の居任限界」(「地理學評論」第二卷三・四・五) 岸本實「吉野川南岸山地の集落と土地利用」(「人文地理」一九四九年) 矢島仁吉「上信國境附近の土地利用と居任形態」(「社會地理」一) 岡本兼佳「福岡縣の裏作様式」(「地理學評論」第二卷四・五) 六合併號) 秋田慶行「四ヶ浦町梅浦に於ける山地平坦面に於ける水田耕作の一資料について」(「地理と社會」一號、一九四七年) 福井縣地理學會編「(「新地理」第二卷四・五・六) は板についた優れた作品であり、河原田次雄「農業地理より見たる

本邦の畜産」(「新地理」第三卷二・三) 合併號、一九四九年) は素材な表現にも拘わらず、永年の深い體驗から滲み出た優れた暗示と熱いをもつていゝ。内田寛一「九十九里灘に於ける農業と水産業との關係」(「新地理」第三卷一九四九年) も名寄帳を用いた貴重な歴史的研究で、豊富な調査資料と經驗に基づいた大作のまともめられる日を期待する。中野尊正「日本の森林資源の荒廢」(「新地理」同上) 代以來の森林荒廢史をのべているが、伐採禁令や豪族の山澤占有禁令をもつて、「森林資源は荒廢の一路を辿つた。」と結論するのはどうであらうか。土地利用以外の經濟地理學の中、水産地理、工業地理に關する研究は、また著しく不振の状態にある。前者に屬するものは、青野壽郎「漁村の業々相」(「新地理」一ノ五) 木村喜之介「鳴潮とカワオ漁場」(「社會地理」二) 長井政太郎「庄内磯濱の漁村」(「同上」) 吉田敬市「漁業と自然環境」(「人文地理」) 後者としては除野氏の前述著書の他は小原敬士「アメリカに於る木綿

工業の發展ニその地理的條件」(研究論集二二)

年三) 村松繁樹・溝口久春「製絲業の立地條件」(新地理除野信道「ソ連重工業の

立地と天然資源」(社會地) 等が算えられ

るにすぎず、重要な國家經濟の要因たるべき水産及び工業に關する活潑な研究が、今後一層要請せられる。猶、水産地理に於て隣接學科の分野から、山口和雄『日本漁業史』(二二年) 羽原文吉『日本古代漁業經濟史』(二四年) 柳田國男編『海村生活の研究』(二四年) 四月) が興えられたことは、折學に對する良き刺激であつた。

(川喜田二郎)

### 其他

#### (一) 人口

從來の人口研究には、人口増減の動遡面と、土地と人口との比較人口密度に關する靜態面の二つの流れがあつた。此の傾向は一應認められるが、しかし、これ等を空間分布の觀點から考察するならば、各地域には各時代の社會關係に規制されながら、各々個有の人口扶養力というものが存する故に、兩者は分離し得ない地理上の對象である。此の點について田中備秀三「人口地理學の一つの試み」(社會地) 及び「日本の人口密度の人口地理學的考察」(社會地) の連關した二論文は興味深い。やむを得ぬ事情からして統計は稍々古いが、人口密度と人口増加率の分布と、地形の分析圖とを併せ、島嶼・リアス式海岸・盆地・低地と平原に分類して考察したものであり、(都市は含まれていない) 日本に於ては地方にあつても山地丘陵は人口が飽和に近い事を指摘しており、ハーヴァード大學アッカーマン教授の先頃の調査報告とも考え併せて、注目すべきものといえよう。さらに、辻田右左男「日本の人口」(日本の風土) は日本の人口問題を地理的に要約した終戦後のこの方面の最もまとまつた論文である。これに關聯して昭和二十一年より二十三年に至る郡市別人口増加率を表現した圖(社會地理十二) は一葉の地圖ではあるが注目される。人口扶養力は、もとより土地生産力の大小・經濟事情——自給經濟を中心にした國と自由貿易國、農業國と商工業國等——或いは國民の生活程度の相違により、種々の様相を示す。人口と天然資源の關係宜しきを得て、高度の生活水準を保つ國もあれば、逆に人口過少乃至過剩國も存する。しかし後の場合に於ても、生活程度の相違が問題であり、英國の人口過剩と日本のそれとは自ら異つた意味を持つのである。

特に、今次戰爭は日本の僻地寒村に至るまで、國民の社會的經濟的生活を破壊せしめ、疎開から戰災、疎開先からの復歸、内地軍隊の復員、軍事産業従業者の移動、引揚者の歸還等、過去に於いて一應安定していた各地域個有の人口扶養力は大きな變動を受けた。この問題については、小笠原義勝「終戦前後の人口移動に關する一考察」(社會地理) 阿崎文規「現下の人口問題」(新地理) 等がある。小笠原氏は、戰災者が郡部に加えた人口壓を調査し、その壓力二〇%以上の地域は、過去に於ける京濱、阪神、北九州諸都市の人口吸引圖と大

體一致する事を明らかにし、次に、郡部に  
 いる戦災者が昭和二十年十一月一日から二  
 十一年四月二十五日までの間に如何なる状  
 態で都市に復歸したかを計量し、更に復歸  
 率の地域的差違の理由を探究している。阿  
 崎氏は、今次戦争の人口への影響に加うる  
 に、近い將來の推計人口の概観を述べ、國  
 民生活水準を昭和五年のそれと同程度に維  
 持する事を前提として、産業規模の擴大に  
 伴う産業人口の増量と其の産業別配分に關  
 する推測的記述をなし、以て人口の地域的

偏在の是正、統制を強調している。その他  
 西水孜郎「人口收容の國土計畫」(社會地  
 理一) (三九ノ五)  
 寺尾琢晴「過剩人口の概念」(三九ノ五)  
 等がある。今や人口問題は、戦後の經濟復  
 興政策と相對應して、重大なる社會課題を  
 含んでいるのであつて、生活水準と人口と  
 の關係から、この問題を考察したものとし  
 て、北岡壽逸『人口問題と人口政策』(斐  
 關、昭) 阿部源一『人口食糧政策の發展形  
 態』(産業圖書株式) がある。阿部氏は、  
 (會社、昭二二)

英國・獨乙に於ける過去の人口増加と食糧  
 需給との關係の考察から進んで我國の問題  
 に入り、特に戦後の問題では、農工比重の  
 逆轉に伴う産業別人口構成の變化、人口の  
 地方分散、都市人口の減少と再集中を分析  
 し、さらに分散人口の性別、年齢別等及び  
 農村の生産力の實體・人口收容力の限界を  
 考察することによつて、分散人口の歸農の  
 限界を究明している。

(田邊賢一郎)

(2) 集 落

集落の研究は地理學上の大問題たるに止  
 らず、諸科學に於ても之の對象として扱わ  
 れている。そこで我々は斯のような諸科學  
 から得られた成果を更に綜合的な立場より  
 形態乃至その機能について地理的觀點より  
 考察すべきであり、此の事は現代の方向で  
 あると共に又その開展は課題でもなければ  
 ならない。

先ず都市に關する問題を概観するならば  
 特に都市に於ては集落構成に作用する原因  
 が複雑でありそれだけ地理學的な綜合觀察  
 が要請されなければならない。都市に關す

る論文としては先ず石川榮詔「東京都復  
 興計畫を中心とする『國土計畫の展開』」  
 (新地理 一巻一號) 宮田秀雄「戦後東京都の性  
 格」(改造二九 一巻八號) や更に木内信藏「大都市  
 成長の力と市街の形態」東京本郷の復興に  
 關聯して」(社會地理 一三號) 等の東京の復興  
 に關する論説があり、後者は特に戦災地域  
 たる本郷に於ける住宅の新建設を迫る事に  
 よつて住宅立地に及ぼす社會的因子を求め  
 んとするものである。その例として之を東  
 大關係職員の住宅と東大との距離の中に求  
 めている。關西の都市に關するものでは住  
 野木壽一・長井勝正「大阪市復興の社會地  
 理的研究」(新地理 二巻三號) 森本利治「神戸市の  
 部心とその位置」(人文地理 二號) 等が見られ  
 る。此等の論文よりうかがい得る事は戦災

大都市の復興に關する地理的關心であり、  
 都市の建設が單に土木技術の問題、或は社  
 會問題の對象としてのみならず、之等を包  
 括し、綜合的立場に立つものとして地理的  
 考察の重要性を物語ると共に、彼上の諸論  
 文が廣く地理學徒の此の方面に對する積極  
 的關心を促す爲の大きな誘因ともなるもの



であろう。而してかかる都市復興に關する關心は東京、大阪、神戸といった大都市に限定さるべきものでなく地方都市に至るまで都市建設の羅針盤的存在として要請されるものである。次に都市の分類については從來多くの試みが行われて來たのであるが如何なる分類もこれが單に分類表として止まり、分類のための分類に終るならば之の價値は著しく減殺されるのであり、従つて「地域を構成する諸要素との關係を明かに」する爲、木内信藏「現代都市の分類」(人文地(理)二號)は經濟的種類、自然環境による分類、民族構成による分類等を指摘してゐる。就中、經濟的種類の方法としては工銀農林水産等の各都市に於ける生産價格の全生産價格に對する比率を求め、かくして得られた諸要素の組合せを分類の標準とする。從來ともすれば都市分類は假令之の機能乃至内部構造に關する考察を考慮したとしても何らかの形で單一の形態に還元してしまふ無味乾燥な方法に窮し勝ちであつた事は否めない。而も之れは多分に直觀的傾向を持つものであり、このような古來の方

### 終戦後我國の人文地理學の動向

法に對する疑問と之への返答として新しい一つの試みと見る事が出來よう。都市、特に大都市は之の形態上産業地區と住宅、教育地區は逐次分離して行く傾向があり、この際前者が都市中心部に集結すれば後者は都市周邊部へと擴がつてそこに衛星都市を建設する。そこでこの衛星都市がいかなる性格を有するものであるかについて種々の方面から考察さるべき問題を持つものであり、大都市の問題に向けられた考察は又自ずとこの方面にも發展しなければならぬ。田邊清子「東京外住宅雪ヶ谷」(社會地(理)八號)は住宅の問題より都市周邊部をとりあげているが、更に都市周邊部、衛星都市が大都市の生存と表裏をなすものであり兩者を結合する交通系統の問題、之による人員物資の移動状況等が明かにされた上各衛星都市自體の性格の解明がなされなければならず此等の問題は今後の研究として殘されているものである。

農村に於ける聚落の研究については「民家ほど人の氣持や生活ぶりを反映する建築はない。」という立場からしたヨーロッパの農村について藤島亥一郎「歐洲の民家」(養徳社(昭二四))があげられる。一方アメリカに於ては社會學者が農村社會學の名の下に農村聚落の問題に觸れているのは我々としても注目しなければならぬ。特に米國農村が云わば處女地に展開した近代的合理的社會の純粹培養であるという點で東洋や西洋の歴史的な、多かれ少かれ中世的なものをとどめた農村との對比に於て集落や農地の形態的考察にとつても今後多くの課題を提示するであろう。例えば Lynn Smith "Sociology of Rural Life" に於ては特に Form of Settlement の項を設けてアメリカに於ける農村集落の形態考察を行っているが、之に就いては辻田右左男「合衆國に於ける村落型と獨立型家」(新地理(號)に紹介されている。特に農村に於ける基礎は土地生産であり従つて集落も土地分類と密接な關係を持つものとして形態的考察から村落のもつ性格、機能に至るまで明かにしている點我々の此の方面に於ける研究上非常に參考となるものが多い。此の様に集落形態及び之の立地を生活集團との關

係の中に把握する事は難かに一つの方法である。既に經濟地理の項でもあげられた尾留川正平「農業地域形式の原理としての集落性格論」(地理學評論二)に見られる集落の考察は先ず集落を Kommunal Geographie としての集落とした後農家の結合様式により集落の抵抗度を求めている。更に森壽美術「安平盆地の住民の入地と集落景觀」(社會地理 一六號) 安田初雄「吾妻安達太郎火山の居住限界」(地理學評論二)では開拓との關係に於て考えられる問題が提起されている。尙アメリカのこれ等研究に關する紹介に木内信藏「グリフステラー都市地理學」(地理學評論)「複合疎村、アメリカ聚落構造の一要素」(G.T. The wartha) (地理學評論)がある。

更に集落研究と關連しては、地理學も亦現下の社會に課せられた住宅、人口問題の社會政策的解決への方面に進んで参加すべきであろう。なおひろく都市問題一般に關しては終戦後「都市問題研究」なる雜誌が關西から出ており『日本都市年鑑』も刊行

されていることを附記して置く。

(木地節郎)

(3) 交通・貿易

この分野に於ける研究はまだみるべきものが無いが、その主なるものとしては、田中薫「道路標識」(社會地理 理六號) 及び後藤光「終戦後に於ける東京市の交通事故に關する地理的研究」(新地理 一卷五號) が見られる位である。此の中後者は、東京舊市街地域に於ける交通量及びその事故の統計をとりまとめたもので、それ等と人口密度(常住人口密度の外、大都市の一特色たる晝夜により變動するそれをも含めて)との間に、一定の數學的關係の存する事を指摘している。伊藤久秋「交通と經濟地域」(新地理 一卷三號)の研究は、經濟地域に對して「交通と分業の協働により結合せる經濟的關聯の及ぶ地理的範圍、換言すれば市場地域」との定義を以て、以て交通機關(氏は主として陸上交通機關を取扱つてゐる)の發達衰微と經濟地域のそれとの相關々係を論じ、交通機關整備の重要性を強調している。先の後藤氏の研究等と共に、現在唱えられる都市計畫

乃至國土計畫の上に、一つの示唆を與えるものとして注目される。海上交通に關しては山口平四郎「滿洲とその海洋門戸」(立命館大學十五週年紀念號) 及び同氏による「日本の港灣」(日本の風土、立命館大學地理學研究室編)が、まず挙げられる。前者は、海上交通と内陸のそれとの接合點たる港灣につき、フィールドを現代の滿洲に求めて論述している。勿論、港灣の立地に關する交通・經濟・政治等の概觀的な綜合的研究であるが、特に商港なるものの交通地理學上の意義、特質を指摘した勞作である。著者も述べる如く、「將來の地域」たる滿洲と、言及せる諸港灣との相關々係如何は、更に將來を俟つて必ず検討するべきであり、又交通地理學上の好テーマの一としての認識を新たにする。

なお氣象學畑に佐藤護「越佐間定期船の缺航と氣象との關係」(氣象雜誌二) 及び安井善一「航海と氣象」(天氣と氣候 十四卷十號) 等の小研究が見られるし、又、坂ノ上信夫「內國航運における近代的展望」(和二二)も吾人の注目をひくものである。

以上が戦後の交通地理研究の概観であるが、近時盛況を示しつつある集落問題、或いは又、土地利用に於ける國土の綜合開發等々に於て交通の占むる位置は重大なるものであり、従つて吾人は客觀的事象の制約を可及的に克服して、常に研究を推進せねばならない。

次に、凡そ今日の如く貿易の重要性を強調される時は無い。しかるに地理學者の間にあつては、これが研究に關しては僅かに田中啓爾「貿易の可能地域」(新地理三卷六號)及び山崎誠一「生絲工場分布と生絲の輸出」(新地理二卷七號)等の小論文を見るのみで研究の不振は全く不可解と言わざるを得ない。勿論交通地理學に於けると同様、戦争の影響を認めねばならぬが、單に經濟學者にそれを委ねて拱手するが如きは嚴に戒めねばならない。卒直眞摯な探究が貿易の面に於ても亦、強く要望せられるのである。

(4) 疾病・氣候 (君塚進)

疾病・地理の分野では、丸山政子による「風土病の衛生地理學的研究」(地理學評論二一ノ一)

終戦後我國の人文地理學の動向

(三)を始めとする一連の勞作がある。氏の研究は主として我國の脚氣の死亡現象を取上げ、その分布と之を制約する自然・社會環境を分析することに向けられている。氏が單に疾病と環境との相關々係の記載のみに甘んぜず、Sporeの病因的複合の概念を導入しつつ、之を具體的な地域と關聯して把える爲に、社會環境の分析、而も常識的結論を避けて、社會的要因の定量化に依る推計學的處理を試みていることは、注目すべきである。然し乍ら、氏のこれ迄の研究は、未だ地域的要因の分析を總て盡したものでなく、更には氏が廣範な對象地域を選んだ爲に生じた統計資料の不備が、研究過程に導入せられる假説を粗大ならしめてゐることは否定出來ず、此の點是非とも、小地域に於ける實地調査に基いた研究が要請せられるのである。

垣内秀雄「伊丹市及びその附近の農村と山村の保健地理」(社會地理一) 堀口友一「茨城縣に於る赤痢の疾病地理學的研究」(地理學評論二一ノ八)

のと言えようが、地域的要因の分析が猶粗笨であるのは惜しまれる。然し乍ら、湯淺謹而「風土と衛生」(社會地理三)に於て、衛生學者の側から衛生學の抽象性が反省せられ、地域の衛生學の要望せられていることを知る時、兎も角も疾病地理學が、群體の疾病現象と言ふ、衛生學と共通の對象を捉えつつ、之を具體的地域との關聯に於て追求していることは、單にそれ自體地理學上の問題であるに止まらず、政策の學としての衛生學に寄與する所も少しとせぬであらう。

次に環境氣候學の分野を見るに、從來充分注意せられつつ猶屢々犯されていた、純粹氣候學のデータを、社會現象に直接利用することの危険に對し、主として生體學者の側から抗議のもたらされたことは、抗議内容の舊さにも拘らず、今一度の反省を要する問題であらう。

木村幸一郎「日本の氣候と住居の形式」(天氣と氣候一四ノ一二) 關口武「日本の生活季節」(社會地理一) 高橋百之「山間に於る日照と日

射と住家分布」(地理學評論) これ等の研究の中、特に關口氏の業績は注目すべきものがある。衣服・食物・住居施設の變化として現われる生活季節を、夫々の土地に於ける氣候環境に適應した、人間社會の長い經驗の具體的表現として理解し、その地域的標榜を追求しているのは、方法論の項でも觸れられた如く類の少ない研究として今後の發展が俟たれる。

これ等は中央氣象台編『新日本氣候圖帳』(昭二三)の中、平均氣温が海面更生を行う以前の生の値で與えられたこと、同じく『雲の氣候圖』(昭二四)中に、從來試みられなかつた根雲期間圖が作製せられたことと共に、氣候を生活環境として把握する立場から、高く買われるべきであろう。

(石川榮吉)

― 結び ―

以上に於て、戦後にみられた人文地理學の動向について考察したのであるが、最後に今後についての若干の展望を試みてみよう。

一、人文地理學の研究は、全般としては

いままお戦後の經濟事情に禍され、研究の基礎的作業である地域調査や資料の蒐集は極めて困難な關係に置かれている。また我國の地理學は、戦前から著しく遅れた状態にあり、専ら外國の諸研究の紹介・攝取に努力が費されて來たが、外國文獻の入手が久しく中断されていた現状では、一層その必要が痛感される。しかし何れにしても、地理學の眞の發展のためには、オリジナルな研究にみるべき成果をあげねばならない。

二、我國が當面している歴史的變革の過程に於て、人文地理學が寄與するには、現實の問題と結びつくことが何よりも必要である。そのためには、人文地理學の地域社會の科學としての方法的批判と反省が要請されることとなる。しかし人文地理學の方法論としては、理論のための理論の如き、實際の研究を進める上に一向動きのとれないようなものであつてはならない。

三、地理學は他の諸科學と密接に協同研究することに努力を拂ねばならない。本來総合的な性質を有する地理學こそは、こ

のような方向によつて最も利益をうける科學の一つであると考えられる。更に地理學そのものに於ては、自然地理學・人文地理學の諸分野にわたつての綜合研究が一層必要である。米國人文科學顧問團の員として來訪したトレワースー教授を圍む地理學分科會に於て、綜合研究の一つとして日本地誌の編纂がテーマとして取上げられ、學術會議地理學連絡委員會によつて、愈々その計畫が實現されることとなつた。

四、人文地理學の如き實際的科學にあつては、あらゆる意味における實際的研究や實地調査にまつところが大きい。その方法について十分な科學的反省が行われているとは云い難い。特にその技術的方法については非常におくれている。この點においては、アメリカの地理學の優れた一面である實踐性を學び取ることが必要である。

(織田武雄)

★ ★ ★